

特集●荒川流域を知る (5)

【荒川の記憶～荒川中流部にて～】

堤防が切れて、この濁流が襲ってきたら。

日本の暮らしに適した平らな土地は、国土の約 1/3 しかない。そのうちの約 1/3 が「沖積低地」と呼ばれる河川の氾濫原。国土の約一割の、地形区分で最も低く、歴史も浅い、軟弱地盤の沖積低地に、人口の約半分、住宅や工場の約七割が密集している。そこに住む人と資産を洪水から守ることが「治水」。河川管理者はそれを第一の任務とする。

水を見に行く (4)

【ロンドンの水・2004年10月4日テムズウォーター取材記】

『水の FORUM』4号で、ゆっくり時間をかけて原水を浄化する方法「緩速ろ過」を知った。日本も戦前までは多くの浄水場がこの方式を採っていた。緩速ろ過で大量の浄水をつくるには、ろ過時間が長い分、事前処理の沈澱池も、ろ過池も広い面積を必要とする。その土地を残し、日本では古いと思った技術を今なお引き継いでいる事態をこの目で見たい。緩速ろ過発祥の地ロンドンに取材した。

【見沼田んぼを黄金色に変える。その三】

荒地を開墾し、耕耘し、畦をつくり、田に水を入れ、代かきをして、平成 16 年 6 月最初の土・日曜日、田植の日を迎えた。

見沼田んぼで活動して私たちは、農業用水は都市用水のように必要なとき、必要な量を勝手に使えるわけではないということを知った。

私たちが取り組んだ田んぼは見沼代用水の末端の末端。なにごとも上流の田んぼが終わるまで水管理できるほどの水はやって来ない。しかも見沼代用水は冬水がない。田畑は乾ききって 5 月 1 日の水入れを待つ。末端の水は上流で田畑が大量の水を飲み込んでから。

しかし、用水路から来なくても上流が潤えば水は地下からやってくる。上流の田の水が漏れて、地下水となって地盤の低い所に集まってくるらしい。

用水路からの水が足りなければ、排水溝を塞ぎ、堰上げしてその水を田に入れる方法も知った。これはまさに、用排水の反復利用。江戸以来の「関東流（伊奈流）」だ。

冷夏も渇水も体験し、改めて稲作は水に基づくことを学んだ。平成 16 年度活動の後半、田植から稲刈りまでの記録を紹介し、水のフォーラムの体験活動第一ステップを終了します。